

国立曽爾青少年自然の家 実践研究報告書

そにとキャンプの意味・意義
～保護者に対する聞き取り調査から～

令和7年3月

国立曽爾青少年自然の家

目次

はじめに.....	1
第1章 「そにっとキャンプ」について.....	2
第2章 調査の目的と概要.....	3
第3章 アンケート調査の結果と考察.....	5
第4章 保護者向けインタビュー調査.....	17
第5章 ボランティアスタッフ（元参加者）インタビュー調査.....	24
第6章 アンケート調査・インタビュー調査からみた「そにっとキャンプ」の意味・意義.....	26
第7章 本調査の課題.....	28
第8章「そにっとキャンプ」について.....	29
参考資料・引用文献・参考文献.....	39

はじめに

ちょうど 10 年前のことになります。「社会に開かれた教育課程」の実現を目指した次期学習指導要領の骨子が示されたのが、2015 年でした。

「新しい指導要領」と呼ばれたこの指針が、学校における指導を通じて「子供たちが何を身に付けるのか」「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」を、改めて明確に示そうとした動きに、当時、新鮮な感動を覚えたことを思い出します。

「子供を主語」として語る。学校教育内に閉じたものではなく、様々なつながりを持ち広い社会・世界のつながりの中で育つことを希求し、「発達の段階や成長過程のつながり」「インクルーシブ教育システム」「キャリア教育」などを重視して「グローバル化」する社会の中で「子供たちがどのように学ぶか」（課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び。いわゆる「アクティブ・ラーニング」）という「新たな問い」を発して、まさしく私たち大人が、それぞれの立場で、真剣に、それこそ課題解決のための主体的・協働的な学びを多様に繰り広げ、実践し、「問い直し」をしてきた 10 年ではなかったでしょうか。

「そにとつてキャンプ」の実践研究は、こうした、「子供を主語・主人公にした社会の在り方」や、社会教育、青少年教育、学校教育といった「学びの在り方」について、青少年教育の立場から社会に問いを発し続ける、そんな役割を果たしてきたととらえております。

そもそも本来、社会的な存在であるはずの多様な可能性を輝かせた子供たちやその御家族に、閉じた枠組みの中ではなく、出会いとつながりの中で学び合えるような場と時間をコーディネートさせていただくことを通して参加者と（ボランティアやスタッフも含めた）全ての関係者が、自分や相互の「変化」に気付き、それぞれの明日からの生活につながっていくことを切に願い、一人一人の個性に寄り添わせていただけるようにプログラム開発に精励してきた、その貴重な実践を基に、ここに報告書としてまとめております。関係の皆さまに心から感謝をお伝えし、また、何かのお役に立つことができれば幸いです。

課題は、次への希望につながります。今後は、仮説と検証、調査や分析の方法、結論などが、果たして的確であったかも含めた検証を要することでしょう。そういった意味において、令和 4 年度までの研究を踏まえて「親子が共に成長することで、キャンプの効果を一過性にせず、普段の生活にも持続すること」を目的とした本研究の歩みに対して、皆様から忌憚のない御指摘や御助言をいただくことが、何よりも、今後も青少年教育の一つの原点として大切にしていきたい「曽爾のそにとつて」をじっくりと成長させていくことにつながると考えます。御指導のほどよろしくお願い申し上げます。

未来に向かって一人一人の青少年が生きることに関わり添わせていただく

私たちの使命とは果たして、と今日も職員と共に、問い直しながら

国立曽爾青少年自然の家

所長 佐藤 素子

（参考：「新しい学習指導要領等を目指す姿（2015 文部科学省）」）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm

第1章 「そにとキャンプ」について

1 事業の概要について

国立曽爾青少年自然の家では、発達に特性がある小学3年生から6年生までの子どもを対象として、社会性や自己肯定感を育むための教育事業「そにとキャンプ」を開催してきた。

20年前に開始した当初は、年間2回行うキャンプ（プレキャンプ、メインキャンプと呼ばれていた）としてスタートしたが、現在は年間3回行うキャンプとなっており、それぞれ「出会いのキャンプ」「冒険のキャンプ」「旅立ちのキャンプ」と呼んでいる。子どもたちがそれぞれのキャンプの活動を通して仲間と協力することや成功体験を経験することで、社会性や自己肯定感を育むことを目的としている。

「そにとキャンプ」の独自の特徴として、保護者も事業に参加することが挙げられる。これは、単に子どもたちの活動を見学するというのではなく、保護者たちに向けたプログラムが展開されるということである。令和5、6年度「そにとキャンプ」では、「出会いのキャンプ」「旅立ちのキャンプ」の際に保護者も参加し、子どもたちが活動している間、講師から子どもたちへの支援について研修を受けたり、子どもの抱える課題や自身の思いなどを語り合い共感したりする時間を設けている。

このように、「そにとキャンプ」は、親子共に成長する機会を提供することにより、キャンプの効果を一過性のものにせず、普段の生活に戻ったあとも持続させることも、ねらいとした事業である。

2 事業の詳細について

「そにとキャンプ」は平成10年度から継続してきた事業であるが、詳細は、以下のQRコードから、令和4年度報告書を御参照いただきたい。

https://soni.niye.go.jp/cms/wp-content/uploads/2023/03/sonitto_practice-research-report_R4-1.pdf



第2章 調査の目的と概要

1 調査テーマ

そにっとキャンプの意味・意義 ～保護者に対する聞き取り調査から～

2 テーマ選定の理由

- (1) 国立曽爾青少年自然の家が実施してきた、「そにっとキャンプ」の意味、意義を過去の参加者の変化を通じた調査で明らかにする。
- (2) 「そにっとキャンプ」の目的の中で、「親子が共に成長することで、キャンプの効果を一過性にせず、普段の生活にも持続することを目指す」(令和4年度報告書から抜粋)としており、保護者自身の変化にも焦点をあてる。

3 調査の概要

(1) 調査方法

- ・保護者向けアンケート調査 →以下(2)
- ・保護者向けインタビュー調査 →以下(3)
- ・ボランティアスタッフ(元参加者)インタビュー調査 →以下(4)

(2) アンケート調査

参加者及び保護者の属性等に関する内容と「そにっとキャンプ」に参加したきっかけやキャンプ後の変化について問う質問紙を作成した。

参加当時の住所に郵送で依頼し、回答はwebフォームにより行った。

なお、調査の趣旨・個人情報の取扱い等を回答者に知らせ、無記名での回答及び調査結果の公表に同意を得られた方から回答を得た。

さらに、次に示すインタビュー調査に協力が得られる方は、インタビュー調査の際に回答内容が必要なため、無記名での回答にならない旨を承諾の上、回答を得た。

① 調査対象者

平成25年度から令和4年度までに「そにっとキャンプ」に参加した児童生徒の保護者

② 調査時期 2024年12月～2025年1月

③ 回答率

107名の保護者に送付し13名分が住所変更等により返送された。

30名から回答があり、回答率は32%であった。

④ 分析方法

アンケートの回答について、回答者の属性などは単純集計を行った。また、参加経験や参加後の変化の自由記述は記載内容ごとにグループ化を行い分類した。

(3) 保護者向けインタビュー調査

① 調査対象者

アンケート実施時にインタビュー回答可能者を募り、その際に合意を得られた1名とオンラインで実施した。

② 調査時期 2025年2月

③ 調査方法

上記アンケート調査で得られた回答を基に調査に対する同意を得て、半構造化面接によりオンラインインタビューを行った。

④ 分析方法

得られた回答の中から特徴的な回答をトピックスとして取り上げ、先行研究などを基に検討・考察を行った。

(4) ボランティアスタッフ（元参加者）インタビュー調査

① 調査対象者

2024年度の「そにっとキャンプ」に参加したボランティアスタッフ（学生）の中で、過去の「そにっとキャンプ」に参加者として参加経験のあるKさんにオンラインインタビューを行った。

② 調査時期 2025年3月

③ 調査方法

「そにっとキャンプ」に参加した当時のこと、ボランティアスタッフについての関わりについて、調査に対する同意を得て、半構造化面接によりオンラインインタビューを行った。

④ 分析方法

保護者、ボランティアスタッフ共に、得られた回答をインタビューの結果、得られた回答の中から特徴的な回答をトピックスとして取り上げ、先行研究などを基に検証・考察を行った。

(5) 調査・研究体制

- ① 国立曽爾青少年自然の家施設業務運営委員会企画評価部会及び実践研究事業報告書作成委員会の委員として、以下の有識者及び関係者により構成し、調査内容について助言・指導をいただき、国立曽爾青少年自然の家企画指導専門職が調査を行った。
富井 奈菜実 氏（奈良教育大学 特別支援教育センター 准教授）
奥田 博 氏（そにっとキャンプ親の会アドバイザー）

第3章 アンケート調査の結果と考察

1 アンケート調査の回答者について

(1) 回答者（保護者）の属性① 回答者（保護者）の現在の年齢と性別

① 回答者（保護者）の現在の年齢と性別

表 1 回答者（保護者）の現在の年齢と性別

	40代	50代	60代以上	総計
参加者の父親	2	2	1	5
参加者の母親	13	10	2	25
総計	15	12	3	30

② 回答者（保護者）参加時の年齢と性別

表 2 回答者の参加時の年齢と性別

	30代	40代	50代	総計
参加者の父親	1	2	2	5
参加者の母親	6	13	6	25
総計	7	15	8	30

父親からの回答が16%（30人中5人）と少なく、母親からの回答が多かった。

③ 初めて「そにっとキャンプ」に参加した年度と性別

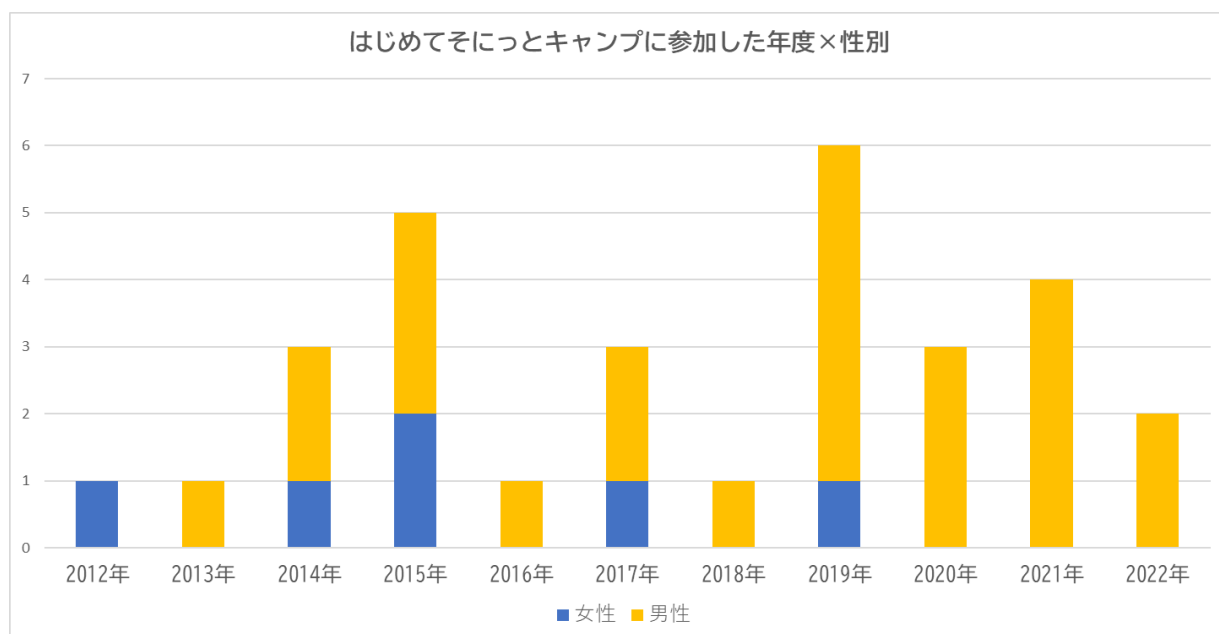


図 1 初めてそにっとキャンプに参加した年度と性別

初めて「そにっとキャンプ」に参加した年度については、2019 年度参加者からの回答が多くみられた。

④ 年度別、性別にみた、初めて「そにっとキャンプ」に参加した学年

表 3 年度別、性別にみた、初めて「そにっとキャンプ」に参加した学年

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	総計
女性												
小学3年生			1	1		1						3
小学4年生				1				1				2
小学5年生	1											1
女性合計	1		1	2		1		1				6
男性												
小学3年生							1	2	1			4
小学4年生					1	2		2	2	2	2	11
小学5年生			2	1				1		1		5
小学6年生		1		2						1		4
男性合計		1	2	3	1	2	1	5	3	4	2	24
総計	1	1	3	5	1	3	1	6	3	4	2	30

男性では、小学4年生の時に初めて参加した児童からの回答が多い。

⑤ 参加者の現在の学校等と性別

表 4 参加者の現在の学校等と性別

	小学生	中学生	高校生	大学生 (専門学校・大学院等を含む)	就職活動中	社会人	総計
女性		1	2	2	1		6
男性	3	11	4	3		3	24
総計	3	12	6	5	1	3	30

回答者の総数としては、中学生から大学生年代から、多く回答が得られた。

2 保護者から見た参加者について

アンケート調査の結果を基に、保護者から見た参加者について検証する。

(1) キャンプに参加する頃の児童の日常について

① 発達障がい診断の有無

キャンプの参加対象は、軽度の発達障がい、発達に特性のある小学生とその保護者として関連し、診断の有無を調査した結果、自閉スペクトラム症などの「発達障がいの診断」や「グレーゾーン」などが28名、2名は「わからない」、「回答無」であった。

② 支援機関などへの利用・参加状況（療育、放課後等デイサービス、適応指導教室など）

28名が放課後等デイサービスや療育などの支援を利用していた。

2名は学校以外での支援は受けていなかった。

③ 「そにっとキャンプ」参加当時の日常の様子（行動面）

「不本意なことがあると、いつまでも同じ不満を言い、不機嫌や泣き続ける。嫌いな食べ物は食べない。食事に1時間を要する。学校で疲れ果てて、家では寝転んで過ごす。(No. 10)」や、「急な予定変更は混乱する。片付けができない。目の前の事にしか集中できず、計画的な行動が苦手。一気に用件を言われるとパニックになる。同時処理が苦手。行動開始するのに、時間がかかる。(No. 14)」など、行動の困難さ、コミュニケーションの難しさ、感情のコントロール、こだわりなどが見られた。

発達障がいのある子どもたちの一般的な困り感と同様であるといえる。

※(No.)は、調査結果の整理番号表す。以下同じ。

④ 「そにっとキャンプ」参加当時の日常の様子（対人関係）

「大人の人のみコミュニケーション がかろうじてできるが、お友達は大好き (No. 5)」、「過集中、こだわりの強さから集団行動が苦手だった (No. 27)」など、コミュニケーションの難しさや対人関係のトラブルなど、こちらも発達障がいのある一般的な困り感と同様であった。

(2) キャンプに参加するきっかけ

① きっかけや情報の入手方法

学校(17件)、専門機関(通級、療育関係)からの紹介(4件)、ネット(3件)、知り合いの紹介(2件)その他(4件)であった。多くは、学校や療育センターなどから情報を得て参加している。自然の家から学校にチラシを配布している時期もあり、多くの参加者がチラシから情報を入手している。なかには、

Web からという記述もあった。

② なぜ参加させることにしたか

「親も日常生活に疲れており、何かキッカケがあれば子どもの状態も良い方向に行けばいいとスがる気持ちでした (No. 18)」という記述もあったが、「いろんな体験を安心してできる環境だと思ったから (No. 9)」、「自然に触れて考える力をつけて欲しかった。(No. 11)」という子どもたちに豊かな体験をさせたい保護者の気持ちが読み取れる。また、「初めての人との共同作業で、人間関係を作る体験をさせたい。(No. 10)」、「学校外での同年代の友達との関わりでいい刺激をもらえたらいいと思ったから (No. 12)」など、社会性、人間関係の向上を願う気持ちもみられた。

「発達障がい児を対象としているため、理解して引き受けてもらえる安心感があった (No. 7)」、「健常児のキャンプは、主催者側の理解が難しかったり、本人の不安が強くなったりするから (No. 22)」など、そにっとなンぷが発達障がい児向けのキャンプであり、障がいなどに対するキャンプ実施側の理解があるだろう、という参加者・保護者の安心感があることが挙げられる。

(3) キャンプに参加することで【参加者】の変化（どんな変化、変化したきっかけなど）

キャンプの参加経験が参加者にどのような変化があったのか、また変化したきっかけについて検証する。

① 事例 (No. 7)

「かなり時間を割いて対応してくださったおかげで、大きな壁を乗り越えることができました。それまでは理解者が母しかおらず、大人に対しての不信感が酷く、親も疲弊し切っていましたが、1 回目を乗り越ったあとは参加を楽しみにするようになり、学校生活でもそにっとなンぷの話題をするなど、かなり生活が変化したことを覚えています。」

「K 大学の先生だったかな、その先生方と O 先生など、暴れる息子にかなりの時間を費やして話をしてくださったおかげです。今でも感謝しております。」

<スタッフ・ボランティアの関わりについて>

「そにっとなンぷ」では、実施年により変遷はあるものの、発達障がいに関わる専門性のある大学教員等や事前にトレーニングを受けたボランティアスタッフが生活やプログラムを共にし、キャンプを行っている。また、プログラムを優先するのではなく、参加者自身のペースに合わせ、参加者自身との関わり方を重視してきた。

これらの関わり方の結果として、参加者に変化があったと考えられる。

② 事例（No. 26）

「何事にも自信がついた。自分以外にも同じ悩み、特性をもつ子の存在を知り、自身の特性を理解したようだ。」

「学生ボランティアに励ましてもらって投げださず活動をやった事が自信になったし、自分もあんな風になりたいと学生ボランティアに憧れをもったこと」

<成功体験>

キャンプのねらいは「豊かな自然のもと、ダイナミックで冒険的な活動を通して、小さな成功体験ややり遂げた達成感を積み重ねる中で、社会性や自己肯定感を養う」（国立曽爾青少年自然の家 2017）としており、参加者にとって、ボランティアスタッフとの関わりを通して活動による達成感、自信につながっている。

<学生ボランティアに対する憧れ>

（No. 26）は、キャンプへの参加により自己理解が進み、学生ボランティアとの関わりから自信が深まり、やがて自身もそにっとキャンプの学生ボランティアとして活動をしていた。自然体験活動が不登校経験者の発達に及ぼす影響を調べた研究では、「不登校児を対象としたキャンプの過去の参加者が学生スタッフになる過程で、学生スタッフに対して<憧れ>をもつ」としている（岡本 2011）。不登校と発達障がいとで若干の差があるとも考えられるが、「そにっとキャンプ」でも同様なことが起こっていたと考えられる。

現在も「そにっとキャンプ」の元参加者複数名がキャンプのボランティアスタッフとして関わっている。

③ 事例（No. 5、No. 27）

（No. 5）「仲間ができ親子ともに生活にはりができた。」「支援級じゃないグループのメンバーと一緒に行動することで、相手に認められていると感じることがあり、自信につながった。」

（No. 27）「自己主張できるようになった」、「学校では女子グループと馴染めなかったけれど、「そにっとキャンプ」の女子グループとは仲良く活動できたこと」

<参加者同士の関わり合い>

（No. 5）、（No. 27）の回答から、参加者同士による影響があることが読み取れる。鉄道に対する興味を通じた、自閉スペクトラム症児への支援の中で、「自閉スペクトラム症児（ASD 児）のコミュニケーションは双方向になりやすく、

コミュニケーションと社会性に障がいがあると評価されるが、同じレベルで受け答えができる相手がいれば、会話が成り立ち、コミュニケーション障がいが目立たなくなる」としている（大西 2024）。スタッフによる支援も一定程度前提になっている可能性はあるが、参加者同士の1年間を通した共通体験や関わりが参加者の自信や成功体験につながったと考えられる。

④ 変化についての考察まとめ

ア 変化と変化のきっかけ

「変化と変化のきっかけ」までの共通点として「他者との関わり」が挙げられる。後述する「濃厚な人間関係」という面も含め、一般的に発達障がいの子もたちが、他者とのコミュニケーションに課題がある中で学校の友達、保護者、教員等以外の新たな他者と出会うことや関わりが、変化をもたらす要因として考えられる。

また、キャンプのねらいは、「豊かな自然のもと、ダイナミックで冒険的な活動を通して、小さな成功体験ややり遂げた達成感を積み重ねる中で、社会性や自己肯定感を養う」（国立曽爾青少年自然の家 2017）となっており、上述の「他者との関わり」の中で、自然の中でダイナミックな活動を行ったことが変化に繋がっていると考えられる。

イ 変化がない

「子供に変わって欲しいと思うことは今でもあるが、以前ほど、求めなくなった。良い意味で少し諦めが付いた。（No. 30）」

「特に無いように感じます。普通のキャンプに行って楽しかったなという感じです。（No. 18）」

大きな変化があった参加者もいれば、一方で変化は見られなかったという回答があった。ただし、キャンプ自体に否定的な回答ではなく、参加者自身には楽しい思い出が残った、という回答が得られている。

なお、変化がなかった要因として以下の可能性が考えられる。

- ・ 保護者が参加する時点で、キャンプを楽しんでもらえば良いと考え、参加者に対する変化を期待していなかった可能性がある。また、行動面などでの変化が乏しく、変化を読み取れなかった可能性がある。
- ・ キャンプに保護者も参加したことで、保護者自身が変化したことで、子どもに対して変化を求めなくなり、発達の受容に対する変化が起こったのではないか。
- ・ キャンプが参加者にとって楽しい思い出としては残っているが、大きな変化をもたらすほどのきっかけとはならなかった可能性がある。

また、「自分からの積極的な行動が裏目に出て、消極的になった」、「自分の意見に誰も共有してくれなくなった」(No. 24)というキャンプに否定的な回答が1件得られた。

今回のアンケートに回答がなかった参加者も多いため、実際にキャンプに否定的な意見もあったかもしれない。スタッフの関わりや参加者同士の関係、キャンプに対する参加者、保護者の思いなど、今後もキャンプを実践していく上での課題となる。

(4) 「そにっとキャンプ」の参加経験は現在の生活にどのような影響があるのか

「そにっとキャンプ」の参加経験が現在の生活にどのような影響があるのか検証する。

① 思い出と感情の豊かさ

「思い出となり、人の優しさ、関わりの楽しさ、信頼感などの体験となり、今では、社会人となって働いております。(No. 7)」

「そにっとキャンプ」で経験したことは、今でも鮮明に覚えていて、思い出話を楽しく教えてくれる。しんどいことが多い中、少しでも楽しい話ができて、参加してよかったなと思える。(No. 22)」

(富井 2023) は大人になって、「あああれ楽しかったなあ」と振り返ることができる体験の大切さを指摘しているが、(No. 7)、(No. 22) など「そにっとキャンプ」の参加経験が楽しい思い出となっていることは、本人の成長にとっても有意義な活動だったことが考えられる。

② 自信の向上、新しい挑戦への意欲

「そにっとキャンプ」後、同じ曽爾青少年自然の家の事業である「夢冒険」にも参加し、ますます学生ボランティアに憧れ、学生ボランティアになることが目的で、不登校生だったが高校受験し、高校生になり、高校1年生で学生ボランティアになりました。(No. 26)」

「自分で考えて行動できる力、仲間と協力してやり遂げる力、チャレンジする力など生活していく中で必要なことができるようになった。(No. 11)」

自信の向上や、新しい挑戦への意欲がわいたことは、「そにっとキャンプ」の目的の一つである「自己肯定感を育む」ことに繋がっていたと考えられる。

(5) 「キャンプ参加時の参加者の変化」と「参加経験」が、現在の生活にどのような影響があるのか

キャンプ参加時の参加者の変化と、参加経験が現在の生活にどのような影響を与えているのか事例を挙げる。

① 非日常的な自然体験活動 事例 (No. 19)

(きっかけ)「沢のぼり、山のぼり」

(参加時の参加者の変化)

「ほんの少しですが、行事や難しい課題に積極的に取り組むようになった気がしました。」

(現在の生活にどのような影響があるか)

「心が豊かになった。」

② 成功体験の積み重ね 事例 (No. 34)

(きっかけ)

「キャンプで初めてのことを見守ってもらいながら挑戦して、意外と良かったとか、出来たという成功体験を何回もさせてもらえたのが良かったと思います。」

(参加時の参加者の変化)

「初めてのことをやってみようとするようになった。」

(現在の生活にどのような影響があるか)

「中学生になって、今までは運動が苦手だったのですが、運動部のソフトテニス部に入り、頑張っています。」

(6) 事例のまとめ

(4)、(5)で検証した、(No. 26)、(No. 11)、(No. 19)、(No. 34)の事例から、成功体験、やり切ったことが参加者にとって変化のきっかけとなっているが、「そにっとキャンプ」では「濃厚な人間関係」(石田 2014)を基盤とし、非日常的な自然体験活動(山登り、沢登り)に取り組んだことで、自尊感情や自己効力感が育まれた結果だと考えられる。

自然体験活動のアクティビティの種類を論じるよりも、それらを「誰と」、「どのように活動」し、位置付けるかが、通常の自然体験活動と同様であるが何よりも大切であると考えられる。

特に「そにっとキャンプ」では、以下の2点がキャンプの基盤として挙げられる。

①同じ発達障がいがある参加者であること

前述の通り、大西(2024)は自閉スペクトラム症児(ASD児)には「コミュニケーションと社会性に障がいがある」とされているが、同じ特性のあるメンバーで活動することで、会話が成り立ち、コミュニケーション障がいは目立たなくなる。また「そこにいたい」という場であれば、子ども自ら成長する、とし「環境調整」の重要性を指摘している。「そにっとキャンプ」では、参加条件に「発達に特性のある児童・発達障がいのある児童」としており、一定程度コミュニケーションの困難さが共通している。このため、参加者同士の関わりが、普段の学校生活等に比べるとスムーズに進んだ可能性が考えられる。

②スタッフの関わりについて

平成25年度まで「そにっとキャンプ」調査研究委員長、「そにっとキャンプ」事業計画委員会委員長として関西大学臨床心理専門職大学院石田陽彦教授に携わっていただき事業が運営されてきた。

当時の報告書(国立曽爾青少年自然の家 2014)では「濃厚な人間関係」について、

「(前略) 大自然の中で「自然に」生まれる状況を利用して、他では体験できない非常に濃い人間関係を子どもたちにリーダー（大人）との間で体験してもらう場所なのであり（後略）」

としており、具体的に

「①みんなとなかよく同じことをすることを強要しない」、「②みんなと同じペースで活動することを強要しない」、「③困ったことをしても『ここは叱るところ』と教育的な解釈をして叱ることをしない」、「④丁寧な言葉の選択をする」、「⑤絶対に逃げない、はなさないで向き合う関わり」

を挙げている。

以上の関わりが調査対象者のキャンプのスタッフ、リーダー（ボランティアスタッフ）に共有されていたのかは、明らかにすることができなかったが、アンケートの結果を見る限り、キャンプの基盤として行われていたと考えられる。

年間で3回のキャンプを、参加者とスタッフが寝食を共にして長い時間を過ごし、自然の中でダイナミックな活動すること、①で挙げた同じ発達に特性のある児童、②スタッフとの「濃厚な人間関係」を基盤とした関わりが参加者それぞれに成長の機会となり、現在の生活にもポジティブな影響を与えていると考えられる。キャンプでの経験が自信や積極性、対人関係の改善に繋がり、家庭や学校での生活に良い影響を与えていたと考えられる。



3 保護者自身について 結果と考察

「そにっとキャンプ」は親子共に成長することを目的とし事業を実施してきた。保護者プログラムとして、子どもたちのキャンプに並行して、講師から子どもたちへの支援についての研修や、子どもの抱える課題や自身の思いなどを保護者同士で語り合い共感したりする時間を設けている。

そこで、キャンプの参加経験が保護者にどのような変化や現在の生活に影響を与えているのか検証した。

(1) 「そにっとキャンプ」に参加して保護者自身の変化と現在の生活への影響

① 子育てに対するアプローチ、姿勢、考え方の変化、親の自己成長

「子どもとの関わり方をそれまで以上に考えるようになった。(No. 31)」、「子育てに対して気持ちのゆとりができた。(No. 9)」、「子供自身に任せてみようと思えるようになることが増えました。(No. 13)」

キャンプの参加経験が、保護者自身の子育て観の変化と自己成長を促していることが読み取れる。発達障がい児を対象にしたキャンプの魅力等を調べた研究では、家族が学校や家庭以外の環境で、いつもと違った子どもの様子や表情を知ることによって親子関係の改善につながることもある、竹内（2020）としていることから、そにっとキャンプでも同様なことが起こっていた可能性も考えられる。

② 親同士の交流とサポート

「同じような悩みを持つ方と話が出来て少し気持ちが軽くなった。(No. 18)」、「同じ悩みを持つ親が他にもたくさんいることが分かり、前向きになれた。(No. 20)」

発達障がいのある児童生徒の保護者同士という共通点から、「同じような悩み」を共感することができ、子育てに前向きになれた様子が読み取れる。

(2) キャンプ後の繋がりについて

- ① 「そにっとキャンプに参加後、保護者同士の繋がりなどで、参加者・保護者同士の関係は続いていますか」という質問に、以下の回答が得られた。

回答	回答数
そにっとキャンプ後から今まで繋がりがある。	16
そにっとキャンプ後から数年は繋がっていたが、現在は関係が続いていない。	5
そにっとキャンプ後から繋がりが無い。	9

キャンプ終了後、半数程度ではあるが、多くの関係が続いていることが大きな特徴である。年代によって異なるが、保護者向けプログラムで「親の会」のグループづくりや活動サポートを行っていた。そのため、保護者同士の繋がりが充実してい

たことがうかがえる。

ただし、今回のアンケートに回答を寄せた保護者が「親の会」の活動に積極的であったか、また「そにっとキャンプ」自体にポジティブな思いを抱いていた可能性もあり、必ずしも全ての保護者が保護者同士の繋がりを保っていたかは判断できない。

② 保護者同士の繋がりは、保護者にとってどのような存在か、影響があったか

「そにっとキャンプ」参加とその後の「親の会」参加で、子どものことで困ったとき(悩んだとき)は、一人で考え込まずに、誰かに相談することを知った。(No. 31)」

「心強い仲間。お互いの子供たちの成長を喜び合えて、お互いの苦労を労い励ましあえる仲間。(No. 27)」

これらのように、多くの保護者同士の関係が、互いの成長や仲間として良い面が挙げられる。

しかし、「同じ発達障がい児で悩みごとを気軽に話せる場面が多かったが、困りごとや進路は同じではなく、子どもが普通に登校していることですら言いにくさを感じることがあった。親同士も言葉に気をつけなければならない場面が多く、会話にはいつも緊張感があった。(No. 33)」という意見もあり、発達障がいという共通点があるものの、必ずしも参加者や保護者の状況は一定ではない。

発達障がい児を対象にした集団心理療法の意義について調べた研究では、親の会のアプローチに関する課題を挙げており、保護者支援について更なるアプローチのあり方の検討が必要であると考えられる。(小澤ら 2013)



第4章 保護者向けインタビュー調査

1 インタビュー対象者

インタビュー対象者 Yさん（以下Y） 大阪府在住。参加者の母親。参加者は現在高校生の女性で小学3年生の時（平成 29 年度）に「そにっとキャンプ」に参加した。アスペルガー症候群（自閉スペクトラム症）の診断を受けている。

以下、オンラインインタビュー内容。（ ）は質問者の発話（原文のママ）。

2 インタビュー調査結果及び考察

(1) 「そにっとキャンプ」に参加する経緯

（「そにっとキャンプ」に御参加される前にも、自然の家には何度かお越しになっていたのですか？）

Y 何か検索していて「そにっとキャンプ」を先に検索で見つけていて、その時は多分対象年齢に合わなかったかも。（「そにっとキャンプ」に参加する前年度に）2月のすごく寒い時に1回、親子キャンプに初めて行きました。（その後、小学3年生でそにっとキャンプに参加）

（お子さんに、自然の中で遊んでほしい、楽しんでほしいことが希望としてあったのですか？）

Y はい、もうずっとあって、大阪で日帰りのデイキャンプみたいな形で親子一緒に、海の観察会とか自然観察会みたいなボランティアでやってくれてはるところですね。そういうところにはずっと行っていて、もうちょっとダイナミックになんかゆっくり、こう、自然の中に浸る生活がいいなと思っていました。

（Yさんご自身がそういうことをお子さんに体験してもらいたい思いがあるというのは、どういったところから？）

Y （子どもには）いろんなこだわりが小さい頃からあって、なかなかまあ、あの、うまいこといかないことも多かった。例えば子どもがまあいろいろでしょうけど、好きそうな遊園地は音がうるさくて嫌だとか。いろいろそういう環境で遊びに行っても、楽しめないことが、まあ割とちっちゃい頃からあって、そういう中で実家が、A山に近いところなので、そういうところに連れて行くと、すごく楽しそうに過ごしているし、自然観察会に行っても、生き物もまあ怖いけど楽しいという、ただ走り回るだけでもこうニコニコしてられる。今住んでいるところが団地ですごくゴミゴミした市なので。そういう

ちょっと設定して、あえて自然の中っていうのは選んで行っていました。

小学1年生ぐらいから大阪府立海洋センターで、1泊のキャンプとか、それから大阪ユースサービス（大阪府青少年活動財団）のキャンプとか、近場ではいろいろ行っていたんです。子どもだけで行かせたこともあるし、発達障がい児のためのキャンプっていうので小学校1年生、2年生と、抽選に当たってたまたま一人で参加したりとかも結構させていました。

一人なので、どうしても私と2人だけで遊ぶっていうのでは限界があるので、意識的に（行かせていて、それは私自身が）子どもの頃、朝日新聞社がやっているアサヒキャンプに行っていて、楽しかったっていうのもあります。知らない人と友達になることは、ちょっと苦手な子どもなので、うちの子がもう意識的に夏休みとか冬休みとか春休みっていうのはそういうところを探して参加させていました。

（キャンプなどに対して、Yさんご自身に関しては、外での体験に、すごくポジティブに思っていたいたということですね。）

Y 自分自身が好きやし、楽しかったっていう思いがあって。

（2）「そにとキャンプ」参加後の変化ときっかけ

① スタッフとの関わりについて

（アンケートから、「学生リーダーに接してもらい、大人を信用できる存在と思ったこと」と回答がありましたが、当時はボランティアの学生やスタッフの関わりがあったと思いますが、回答について詳しく教えてください。）

Y 一番はじめの時に私が主に担当しますみたいな紹介をしていただいて、実際、グループにリーダーと子どもが一緒に入る形だったように聞いています。おそらく泊まる部屋も一緒に泊まってもらって、こんな活動をしました、ということを書いていただいたのも親にもいただいて、話も終わった後に3回ありました。その3回ともにそういうのを書いてもらって、2回目が始まる前に宿題として、もうすぐまたキャンプあるよ、元気に来てね、みたいな手書きのなんかちょっとメッセージ入れてもらっていました。結構きっちり一緒にいていただいていたと思います。

（学生スタッフとの関わりみたいなことが、お子さん自身にとってもすごくポジティブなことだった、嬉しい感情や、なんかまた会いたいみたいなこととか、そういうこともあったのですか？）

Y そうですね、はい。気が合ったというか。向こうが上手にしてくれるので、3回生か4回生のベテランの学生さんで。私とその娘が初めて（曾爾に）行った時にもいた学生さんでちょっとお話をしたこともあって。一泊の時には、今、向こうが覚えてはるかどうかわからないね。参加者が多い中なので、このお姉さん一緒にいたよねっていうぐらい。

② 楽しかった思い出について

（なるほど、知っている人だということもあったのですね。キャンプで、一緒にご飯食べる、お風呂入ること、山を歩くことなど、いろいろあったと思いますが、お子さんを見ていて、帰ってきてから楽しそうにやっていたとか、何か具体的にありますか。）

Y 嫌だったっていうのは言ってなかったですよ。一つは、困ったっていうのはちょっとあったのかな？なんか少しなんかお友達がこんな風に言われて、どうしたらいいかわからなかった、っていうのはあったんですけど。これ、これをやって楽しかった、こんなことができたっていうのを多分、もう大阪の生活では味わえないことがすごく多かったので。

（例えば、自分たちでご飯作りをして食べたとか、少しチャレンジなことをしたことなど。）

Y そう、どちらかというと、ご飯作りは、自分はできたって言うんですけど、ハイキングでどこに登って風景が綺麗だったとか、温泉とお風呂が好きですけど、山から降りて温泉に行ったのがこんなんやったって、お土産買えたとか、そんなこともしたんだなっていうことが多かった感じですね。なんか何かの時にふっと思い出してキャンプの時、こんなんことをしていた、ぽつぽつ結構うちの子が、一個一個の種目をきっちり言葉で説明していましたね。

みんなで活動していた写真みたいなのも、1回目のキャンプで、2回目の時に1回目はこんなんしたよねって思い出のなんとかとかみたいなら、それ見てまたその2か月前のことをまたしゃべったり、という感じですね。

（全体を通して関わりや、やったことの中で、楽しい思い出や、一緒に参加した子どもたちと普段関わりのある方々とはちょっと違う友達みたいになっている、という感じですか？）

Y うん、そうですね。今でも親同士が仲良くなって、そのまま年に1回、2回ぐらいキャンプを一緒にさせてもらったりしている人もいて、お友達との関係も大学生の方がたくさん入っている中なので、嫌な思いというのは全くしてないみたいなんですよ。トラブルは当然あったはずですけど。上手に処理してもらっていて、だから嫌な思い

は全然残っていません。

保護者から見た、参加者のキャンプに対する様子とキャンプに対する思い

インタビュー調査の前半では、キャンプに参加する経緯から、キャンプに参加してからの変化について伺った。インタビューの回答から以下のとおりまとめた。

① 保護者自身も自然の中で活動することに、良さを感じていること。

一般的に発達障がいの子どもたちは、人混みや大きい音などに苦手意識があることが多く遊園地などに苦手意識があるとされている。自然の中では先行きが見通しにくい、ということはあるもののゆっくりとした活動をすることもできる。Yさん自身が自然の中で活動することに良さを感じており、子どもをキャンプなど体験活動に積極的に参加させていることが印象的であった。

② キャンプが楽しい思い出になっていること

「嫌な思いは全然残っていません」という回答から、参加者、保護者それぞれに良い思い出として受け止められている。

(3)親の会

(親の会の話について。O先生や、K大学の先生も関わっていた時代かと思いますが、親の会は、施設でバックアップをしながらやっていたということを、O先生から伺っていたのですが、当事者の方々はどのような感じでやってらっしゃったのですか?)

Y 3回のうちの2回を親が参加する形だったと思うんです。O先生に初めから親の会を作ることが目的だと言われていた。親は別室で集まって話をしたりして、3回目のキャンプ最後の時には、実際に、終わった次の夏に計画までして帰った気がします。翌年のキャンプには、一家族来てなかった以外、全部来ていたかと思います。

年々参加は減ってはきましたが、O先生は私たちより上の人たちが、これまでどういう活動している、親の会として頑張っているということを教えてくれていました。(後略)

(保護者同士の繋がりということを回答いただいていますけど、遠くの同士みたいなこととか、キャンプの後もいい関係だったのですか。)

Y いろんな思いの方がいてはるでしょう。うちは何人かと、今も交流がありますね。遊びやイベントの紹介をしたり。学校に途中で行けなくなっている人は多かったんです。なので、不登校の親の会の集まりがこんなのがある。そういう人たちが紹介をLINEで流したり。そういう情報交換はね。今便利ですよ。LINEを使った情報交換と、あとは

保護者向けの講習会に行ってみたら、あの人も来ていたとか、2年ぶりとかそういう感じですね。

(4) 「そにっとキャンプ」参加後、現在の生活に対する影響について（参加者）

（アンケート調査で「お子さんが「そにっとキャンプ」に参加されて、現在の生活どのような影響を与えているかと思えますか。」という質問に対して、「友達ができて、同じような子がいるものだった」とお答えいただいておりますが、詳しく聞かせてください。）

Y うちの環境が都会の過疎地で、小学校1年生から中学校の9年生、うちは小中一貫校で公立なんですけど、各クラス30人だけで。他の学年ももう30人以内学年とかあって、上下の繋がりはすごくあって、（中略）、同級生が30人しかいないって、女子が12人と、クラス替えももちろんないです。だから、なかなかうまく気が合っているのがあんまりなかった。それで、そういう（キャンプに行ったら）、「自分と似たような子が結構いるもんやなって思った」んですって。それは、今になって、当時はそんな言葉では言ってなかったですけど、楽しかったからまた行くっていう言い方しかしてなかったんですけど。

(5) 「そにっとキャンプ」参加後、現在の生活に対する影響について（保護者）

（Yさんご自身はいかがでしたか？）

Y やっぱり（キャンプに）行くと、知らないことが知れる面白さとかがあって、一年ぶりに親戚に会うような感じでした。そんなことあるの？とか、奈良と大阪って全然やっぱり状況が違うので。やっぱり福祉制度などは、それぞれにやっぱ違うねっていう話はよくしていました。

うちの場合は通信の高校進路選択の時に、結構みなさん悩まれている、それぞれの地域である資源を利用するしかしょうがないですけど、でもそういうのを聞くと、ああ、なるほどっていうのは、思いましたね。

（このキャンプだけではないと思いますが、そにっとキャンプに参加して、参加者・保護者に変化や、影響はありますか。）

Y とりあえず多分一人で過ごしたいんですよ。子どもはね、親から離れて。それがキャンプをして帰ってくると、まあ機嫌が良いんですよ。そんなに長続きはしないんですけど。（中略）まあ、こっち（保護者）は楽ですね。キャンプに私と一緒に参加すると、私は家事をしなくてよくて。

旅行に行かないと子どもと向き合っていないなって思うんですよ。家にいると仕事に

行くし、時間のない中でご飯を作って、時間のない中で学校に送り出して家事をするから一緒に過ごしてはいるけども、やらなければならないことを2人がこう、並行でこなしているだけで、(子どもを)見てへんなと思うし、会話もそんなにしてない。今日学校で何があったんぐらいですよ。キャンプで別々の生活をしていたら、今日何したんとかも、次の日には一泊して、昨日の夕方どうしたん、とか何々しててっていう会話のネタも2人が増えますし。なんか旅行は極力、続けていこうって思うようにはなりましたね。

(6) 「そにっとキャンプ」について

(「そにっとキャンプ」というものが、お子さん、保護者自身にとって、どんな意味をもった一年のキャンプだったのか、教えてください。)

Y いろんなキャンプがある中で、その対象を発達障がいって書いてくださっているの
で、やっぱり一番フィットしていたんじゃないかなって思うのは思います。親も安心
して本人も安心して参加できる。タイトルに書いてくれてはるから安心感がありまし
た。

(中略) また、マンツーマンで自分(子どもの)の要求を聞いてもらえることが、家では私がそんな聞く余裕もないので、というところは大きくて。満足感が得られるという活動がちょっとでも増やしたいなと思っていました。(後略)

(7) 最後に

(インタビュー全体を通して、最後に何かありますか)

Y こう活動が続いて、細々とでもやっぱり必要としている人はいるので。続けてもらえたらいいだろうというのは子どもと話をしました。

(8) まとめ 保護者同士の関わりや、現在の生活に対する影響について

インタビュー調査の後半では、キャンプに参加する経緯から、キャンプに参加してからの変化について伺った。インタビューの回答から以下のとおりまとめた。

① 保護者同士の関わり、親の会の存在

「いろんな思いの方がいてはるでしょう。」という回答から、保護者においても保護者同士の繋がりを肯定的に捉えている方と、そうではない方とそれぞれの思いがあった。

② 現在の生活に対する影響について(参加者)

「自分と似たような子が結構いるもんやなって思った」という回答から、同じ発達に特性のある児童との出会いが、参加者自身の他者とのかかわりを豊かにしたことが読み取れる。

③ 現在の生活に対する影響について（保護者）キャンプの仕組が、親子の向き合う時間になっていること。

「旅行に行かないと子どもと向き合っていないなと思うんですよ」、という言葉が非常に印象深い。親子でキャンプなどに参加することで、親子が向き合う時間がとれ、親子が共通した体験を行える価値と意義がキャンプにあることを気付かされた。

④ そにとキャンプの良さ

「マンツーマンで自分の要求を聞いてもらえる。多分家では、もう私がそんな聞く余裕もないしっていうところは大きくて、満足感が得られるという活動がちょっとでもねたくさん増やしたいなと。」という言葉から、スタッフがマンツーマンで深く参加者と関わることで、参加者自身の満足が高まる時間を過ごせることが参加者自身の深い体験として大きく刻まれているのだと考える。



第5章 ボランティアスタッフ（元参加者）インタビュー調査

そにっとキャンプボランティア（元参加者）Kさんにインタビュー調査を行った。Kさんに「そにっとキャンプ」に関わるきっかけ、自身の変化について質問した。

以下、インタビューの抜粋とまとめを記述する。（ ）は発話者、テキストボックス内はまとめ。

（1） Kさん（以下、K）について

小学5年生で「そにっとキャンプ」に参加。大学3年～4年でそにっとキャンプをはじめ、自然の家のキャンプ等にボランティアスタッフとして関わる。

（どういう経緯で曾爾のボランティアに参加することにしたのですか？）

K 今まで楽しませてもらったので、今度は僕が楽しませてあげよう。恩返しっていう意味です。

Kさんは、過去の「そにっとキャンプ」で自分がしてもらったことを恩返しとして自分もなにかやりたいという気持ちが大きなきっかけだった。

（2） 「そにっとキャンプ」にスタッフとして参加した変化など

（「そにっとキャンプ」にボランティアスタッフとして参加して自分自身についての変化はありましたか？）

K 2023年度（1年目）は裏方の仕事（直接子どもと関わる場面が少ない担当）が多かったんですよ。だけど僕と同じタイミングで入ってきたAさんやBさんが1年目から子どもたちと関わっているところを見て、なんかどこが違うんだと？（中略）
あとは、他のボランティア同士との関わり方。なかなかすごい会話が盛り上がっているのか、僕はもうだいたい、そこからあの割り込む隙を伺うぐらいしかできなかった。（後略）

Kさんは、ボランティアとしてはじめからキャンプで貢献できていたという実感はなかった。他のボランティアと自分を比べてしまい、そんな自分を守るのに精いっぱいだった。誰かを頼ろうとしても、うまく助けを求めることができなかったり、誰かを信頼して頼ったりすることができなかった。そんな自分に対しても、ネガティブな感情があった。

そんな自分が前向きになれたきっかけが2024年度（2年目）「そにっとキャンプ～旅立ち～」だった。大きく2つあった。そにっとキャンプのまとめとも言える3回目のキャンプで、今までの自分とは違う、新しい自分に出会うことができた。

1つ目は、同じボランティアのCさんとの関わりだった。同じ班を担当した。Cさんが子どもの観察シートに子どもの様子を記録し、自分は子どもの様子を見守るなど、仕事を分担し、協力することができた。全部自分でするわけではなく、誰かを頼っていいんだという安心感があった。

K その時、僕のパートナーがCさんとだったんですけど、僕が子どもたちの注意を引きつけて、Cさんが記録したりとかしている形だったんですよ。そこらがすごくなんか、息が合っていたみたいで、すごい子どもたちからも褒められるし、2人で全力でやっていました。(中略)

2つ目は、参加者のHさんとの関わりだった。キャンプの中で班に帯同して、自分なりに子どもたちと関わることもできた。キャンプの中でうまくいかないことがあったが、Hさんをはじめ、子どもたちの顔を思い浮かべると、もう一回頑張ろうという気持ちにさせてくれた。誰かが自分を頼りにしてくれたおかげで、自分に少し自信がつき、前向きになることができた。

K そにとっとキャンプに来てくれている、Hさん（参加者）が僕のことすごく気に入ってくれていたんです。(後略)

(この二年間のボランティア活動は、「そにとっとキャンプ」に関わらずKさんにとってどのような気持ちでしたか?)

K ポジティブな変化は出ました間違いなく。(ボランティア同士で) 協力し合えるということで、なんかちゃんと(人を)信用できるようになった、というのもそうだし、やっぱり恩返ししたいっていう気持ちが芽生えた。今までは自分を守るのに精一杯だったんですよ。だから友達にもなんか厳しい言い方したりして。自分の正しい意見を押し付けていた。もう全面的に受け容れられた経験や、言われたことで、この人たち(ボランティア仲間)を大事にせなと思うようになった。(今は、)もうボランティアの中(ボランティア同士だけの関係)で終わりがたくない。この人たちと一緒に過ごしたいって思うようになりました。仲間とずっと一緒にいたい。なかなか会えないと思っているんですよ。(後略)

(3) インタビュー調査まとめ

このように、「そにとっとキャンプ」で自分に与えられた役割を通して、誰かに頼りにされたり、誰かを頼りにしたりすることができ、Kさん自身がボランティアスタッフとしてキャンプに関わったことで大きな変化をもたらしたと言える。

第6章 アンケート調査・インタビュー調査からみた「そにっとキャンプ」の意味・意義

アンケート調査、インタビュー調査から得られた「そにっとキャンプ」の意味・意義を検証する。

1 同じ特性のある、新たなる他者との出会いや関わりを通して生活や体験を行うこと

(1) 新たなる他者との出会い

発達に特性のある児童を対象としたことで、参加者側からは参加にあたっての安心感が得られていた。また、同じ特性のある参加者同士のコミュニケーションと年間（3回）を通じた関わりが、参加者の変化に一定の影響を与えていたと考えられる。

(2) 体験の機会保障としての側面

保護者は子どもに豊かな体験をしてほしいと願っているが、発達に特性のある児童が安心して参加できる機会がそもそも少ない（渡部 2022）。全てのニーズに応えることは困難であるが、「そにっとキャンプ」が、発達に特性のある児童の体験の保障に果たしてきた役割は大きいと考えられる。

2 ボランティアスタッフを含めた、スタッフの関わりによる影響

(1) スタッフによる関わり

事前に研修を受けた、ボランティアスタッフを含めたスタッフの関わりによる「濃厚な人間関係」を基盤としてプログラムが展開されることで、参加者や保護者に良い変化やキャンプを通じた成長を実感できる機会となっていたと考えられる。

(2) 参加者からスタッフへ成長する機会であること

参加者がキャンプの際に、ボランティアスタッフに「憧れ」や「感謝」をもつことで、ボランティアスタッフとして関わる流れが出来上がっていた。同様のキャンプを継続的に実施していることでの良さであり、スタッフ自身も多様な背景をもつスタッフが関わることで参加者に対して良い影響を与えていた可能性もある。

3 保護者へのアプローチによる変化

(1) 保護者自身の学び

保護者に体験や研修の機会があることで、保護者自身の子育て観や子どもとの向き合い方に影響を与えていた。

(2) 保護者同士の繋がり

保護者同士の出会い、繋がり、学び合いなどから、保護者が互いに影響を与えていたことが伺える。

以上のことから、「そにっとキャンプ」が参加者、保護者に様々な影響を与え、プラスの体験としてふりかえられている傾向にあることが本調査から得られた。

第7章 本調査の課題

本調査の課題として、以下が挙げられる。今後の調査や実践において検証が必要である。

1 アンケートの回収率

回答率 107名の保護者に送付し13名分が住所変更等により返送された。30名から回答があり、回答率は32%であった。そのため、得られた回答は、比較的「そにとキャンプ」を好意的に捉えていた保護者であった可能性もある。

2 アンケート調査、インタビュー調査の分析方法について

両調査ともに自由記述やインタビュー内容を抜粋し分析している。回答内容のグループ化を行っていないことが、本調査の分析の上で課題である。

3 当時のプログラム等についての確認が不十分

今回の調査を行った期間にキャンプを行った職員や、ボランティアスタッフにプログラム内容や、当時の様子について十分に様子を聞き取ることができなかった。そのため、当時の資料、報告書を参考に分析を行ったため、アンケート結果の検証が十分でなかった可能性がある。

今後、キャンプ参加時にこのキャンプを行うことがモデル的事業の普及になっていることを理解の上、「調査への協力」を前提に参加していただくことを承諾いただき、追跡調査等を実施することも考えられる。

またキャンプを実践していく上で、キャンプのねらいや意図、重視していること等を記録や資料として残していくことが重要である。

第8章「そにとキャンプ」について

1 そにとキャンプの発達の意義

奈良教育大学 特別支援教育研究センター
准教授 富井奈菜実

前回の報告書において、「子どもたちのめっちゃ楽しかった！とか、めっちゃ大変だった！という大きく揺れ動いた思いや感情、それ自体の意義や価値を見落とさない」ことや、「自分自身を振り返ってみたときに、なんとなく、あの経験が自分を作ってきたな、とか、いろんな人に出会って今の自分があるんだなというように思えることが、自己を形成していく上で重要な要素となる」ことを述べました。そうした子どもたちの思いや“自分づくりの歴史”に焦点をあてながら、今回の調査の結果を考察したいと思います。

はじめに、＜キャンプに参加したことでの変化＞にあった、“大人に対しての不信感が強かった我が子に変化がみられた(No.7の方)”という回答が印象に残りました。この方は＜キャンプの参加経験は現在の生活にどのような影響があるか＞という項目には「思い出となり、人の優しさ、関わりの楽しさ、信頼感などの体験」になったと回答されています。このお子さんが人との関係づくりにおいて困難を抱えてきたこと、そにとキャンプの経験がそれを乗り越えていく一つの大事なきっかけになったことを読み取ることができます。

自閉スペクトラム症(以下、ASD)児者の発達を研究している別府哲先生は、ASDは共感する能力の障害があると“誤解”されているが、ASDは他者に共感されにくい点に障害を形成する要因があると述べています(別府, 2024)。対人関係においては、ASD児者にとっての“普通”が、多くの人考える“普通”とは異なることがあり、ここに共感されにくい状態が生じます。そうした状況において自分の発言や行動が認められなかったり、時には否定されたりするなかで、不安や混乱を抱え、人への信頼感を失ってしまう、そういう辛さを彼らは抱えているのではないのでしょうか。

再度No.7の方の回答をみると、上記した人の優しさなどを感じられる体験になったのは、「暴れる息子にかなりの時間を費やして話してくださったおかげ」とありました。具体的にどのような場面であったかはわからないのですが、きっと、周囲の人たちは彼の思いや気持ちを否定するのではなく、対話を通してその場面をともに乗り越えていったのだと思われます。また関連して、「発達障害児を対象としているため、理解して引き受けてもらえる安心感があった」ことをキャンプ参加の理由にあげておられますが、発達障害児への理解があるというのは、彼・彼女らの困難さや楽しさなどが無条件に“共感される”ことと捉えることもできそうです。

また保護者へのインタビューにおいて、普段の学校生活では「うまいこと気が合うっていうのがあんまりなかった」のが、「(キャンプに行ったら)自分と似たような子が結構いるもんやなって思った」とお子さんが語っていたというものもありました。大人との関係に限ら

ず、学校の外で出会ったなんだか分かり合える仲間がいたことも、楽しかったと思える経験につながっていたようです。さらにこのお子さんも、「大人を信用できる存在」と思えたことがその後の変化につながったようでした。

このように共感されたり、分かり合える経験が人の優しさ、関わりの楽しさ、信頼感などを実感することにつながっていくのだろうと思われます。同時にそれは、自己を形成していく上でやはり重要な要素といえます。

さらにその背景として、比較的自由な枠組みをもったプログラム設計であったことも重要です。子どもたちのその時々思いや状況に応じてゆるやかに活動を作りかえることができる、そのゆとりが共感や分かち合いを生むうえでも必要なのではないのでしょうか。

今、学校は子どもも大人も、やることがいっぱい忙しいと言われています。子どもたちの気持ちの揺れ動きに大人も共に揺れながら、一緒に考え乗り越えていけるような環境が、十分に整えられない状況におかれているのではないかと思います。だからこそ、そにっとキャンプのような体験が大切ということもできますが、子どもたちの発達にとって必要な人間関係や活動について、そにっとキャンプからみえてきたものを今一度検討し、発信していく必要性を改めて感じています。

最後に、今回の調査では多くの保護者やボランティアの方にご協力いただきました。そにっとキャンプへの参加が子どもたちにとってどのような経験になったのか、さまざまな再発見ができた調査になったと思います。またそれは、小西さんを中心とした職員の皆さんの細やかな聞き取りと分析があったからこそ見えてきたものです。貴重な調査の結果が発達障害のある子どもたちの教育や支援に活かされることを願っています。

文献

別府哲(2024)「鉄オタ倶楽部の発達の意義」『鉄オタ集結！「好き」を強みに♡発達障害のある子の居場所「鉄オタ倶楽部」』 富井奈菜実・越野和之・別府哲編著 クリエイツかもがわ

2 「そにっとキャンプ」の発展的継続を願う

そにっとキャンプ親の会・アドバイザー 奥田 博

国立曽爾青少年自然の家が主催する「そにっとキャンプ」は、発達上の特性を有する子どもたちを対象にした事業である。

私は20年前に自然の家に勤務した時からこのキャンプに関わり続けている。

思い起こせば、この20年間、「そにっとキャンプ」は社会情勢の変化に対応しつつ、自然の家の看板事業として今年度も実施された。このキャンプのメインプログラムは、自然豊かな曽爾高原を舞台にした、宿泊を伴う冒険的自然体験活動で成り立っている。これらのプログラムは、子どもたちにとって困難な状況を設定し、なかまと共に協力し合って克服させようとする意図がある。

また、このキャンプには保護者が一泊二日で参加しなければならないという特徴もある。保護者は、子どもたちの活動とは離れ、保護者向けのプログラムが用意され、発達特性についての知識や子どもたちとの接し方等を学ぶことができ、参加保護者間の交流の場でもある。

「そにっとキャンプ」の効果については、専門家も導入しての効果測定によれば、社会的スキルの向上だけではなく、達成感や自己効力感から自尊心を高められるという可能性も見いだされている。しかし、このキャンプが年に数回という短期のキャンプであり、また、人気のキャンプでもあるため、リピーターとして翌年にも参加できるという保証はない。その結果、このキャンプで得られる効果は、一時的・一過的なものに留まってしまい、キャンプで得られた子どもたちの自尊心は、日常生活の中に溶け込み、一般化されることを期待することはできない。

この課題に対応して誕生したのが、「そにっとキャンプ・親の会」である。毎年実施される「そにっとキャンプ」の保護者プログラムの中で、親の会の活動を紹介し、新たな親の会を誕生させるという試みは、一期生の誕生から令和5年度に誕生した親の会で10期生となる。親の会は、「そにっとキャンプ」の活動を継続するために、保護者が自然の家の支援を得て、自主的に活動する組織化された団体である。

この会が実施する活動は、自然の家の「そにっとキャンプ」をモデルに、専門家、ボランティア等に支えられ、保護者自らが企画・運営する。宿泊を伴う野外キャンプを主体に、時には日帰りキャンプや遠足等も活動の範疇に入れている。このキャンプが目指すものは、自然の家の「そにっとキャンプ」で得られる効果を持続させようという狙いととも、同じ思いを共有できる保護者の情報交換と子どもたちの成長を確認できる場でもあり、保護者のメンタルケアも付随してくる。

コロナ禍で親の会の活動も一時的に不活発になったが、各親の会とも連絡を密にしながら情報交換は絶やさないでいる。

子どもたちは成長し、一期生から三期生の親の会の子どもたちの多くは成人式をすましている。「そにっとキャンプ」に参加した頃の子どもたちを思い起こせば、我が子の将来を

心配した保護者がほとんどだった。いま、子どもたちが社会人としてそれぞれの職場で活躍している姿を想うとき、親の会の活動で、我が子への思いや悩みを打ち明け合い、涙して語り合ったことも懐かしい思い出でもある。

自然の家の看板事業でもある「そにっとキャンプ」の今後の発展的継続を願うとともに、新たな親の会の活動を期待したい。

3 「そにっとキャンプ」担当者から

国立曽爾青少年自然の家 主任企画指導専門職
三木智弘（令和5年度、令和6年度事業担当）

幸運にも「そにっとキャンプ」に3年間関わることができた。

直近の2年間(令和5年度、6年度)は主担当としてキャンプのコンセプト、企画立案から準備、実施、振り返り、評価に至るまで概ね携わることができた。

私が担当した2年間は、「日本では迷惑をかけるなと躰けられるが、インドでは人は迷惑をかけるものだから迷惑を許せる人になりなさい」という考え方を拠りどころとした。

「そにっとキャンプ」の対象については、発達障がいがあるもしくはその傾向がある、とされる子どもたちに加え不登校傾向など集団や学校生活に「困り感」がある子どもたちに広げた。年齢については「小学校3年生から6年生」を「小学校4年生から中学1年生」に移行した。これは学校や社会が子どもたちの居場所として制度的に限界を迎えている現代的な課題に対応したものと考えている。そのひとつである中一ギャップを視野に入れつつ、体力的に負荷のかかるプログラムも実施できる可能性を高め「達成感」や「自己効力感」を得やすいよう意図した。

【子どもプログラムについて】

「そにっとキャンプ」では、春、夏、冬年間3回のうち、子どものプログラムを全3回、保護者のプログラムを春、冬の2回行ってきた。

子どものプログラムは「出会いのキャンプ」でボランティアの学生や新たに出会った参加者と共に自由に森で遊ぶことにより、新たな環境に慣れ、夏のキャンプを楽しみにすることを目標とした。同時に、職員にとっては、(特に夏のキャンプの計画を立てる参考のための)アセスメントの機会でもあった。「冒険のキャンプ」は、特に今年度はリピーターの子も多くそれぞれ心身共に成長が感じられたことやキャンプの経験があることを鑑み、負荷がかかる「登山」をプログラムの中心に据えた。「旅立ちのキャンプ」は、子どもたちが班ごとに活動内容や野外炊事のメニューを選択プログラム中心のキャンプとした。これは、子どもたちが自己決定する喜びを得るだけでなく、子ども同士のコミュニケーションが濃密になることを期待している。

【保護者プログラムについて】

保護者のプログラムについては、「そにっとキャンプ」における7割程度の比重を占めると考えながら計画している。これは決して子どものプログラムを軽視しているわけではなく、保護者の心持ちや関わり方の変容、あるいは保護者同士の継続的なつながりからもたらされる安心感や情報が今後も長く子どもたちに影響を与えうることを期待しているからである。

前述のように、保護者プログラムは春の「出会いのキャンプ」1泊2日と冬の「旅立ちのキャンプ」1泊2日、計2回に参加する。どちらのキャンプも野外炊事や班活動、自然体験活動、親睦会など保護者の親睦が自ずと図られるような時間を大切にしながら多方面で活躍される多様な講師陣や将来の進路を見据えられるような会社やNPOなど支援機関からの情報提供、更には、現在ボランティアとして子どもたちに関わる「そにっとキャンプ」のOBの学生との対話など、多様な研修の機会を設けている。

参考までに、この3年間にお越しいただいた講師を付記しておく。

- ・奥田 博氏（NPO 法人地球元気村校長）
- ・吉田 昌功氏（現五條小学校講師、元曾爾小中学校校長、元大和高田市教育委員会特別教育専任指導員）
- ・韓 昌完氏（下関市立大学 学長）
- ・横道 誠氏（京都府立大学 准教授）
- ・竹端 寛氏（兵庫教育大学 准教授）
- ・田口由美氏（株式会社リタリコ）
- ・野田満由美氏（NPO 法人み・らいず2）
- ・そらねこ（「そにっとキャンプ」ボランティア、当時高校3年生、
「そにっとキャンプ」OB）
- ・ジャカヤ（「そにっとキャンプ」ボランティア、当時大学4年生、
「そにっとキャンプ」OB）

【ボランティアについて】

ボランティアの存在は事業を成立させるうえで非常に重要な要素と考えている。その他の教育事業以上にボランティアの在り方や関わり方が事業の成否を左右するキャンプが「そにっとキャンプ」である。春のキャンプのボランティアの实地踏査時には、特別支援教育についての研修会（上記の吉田氏による）や事前の説明会をオンラインで設け、具体的な流れだけでなく、根本的な考え方や在り方、関わり方を共有する機会を設けている。子どもたちにとってボランティアの存在が重要であると同時に、ボランティアにとっても子どもたちから学ぶチャンスが多いキャンプであるため、希望するボランティアについては、できる限り受け入れるようにしてきたことも、特徴的かもしれない。ボランティアと子どもたち、子どもたち同士の相互作用により、安心で安全なベースがキャンプ空間にできあがるものと受け止めている。

また、ボランティアには、多くの願いをしてきた。以下に例示する。

- ・診断名などで子どもを見るのではなく、その子自身の現実から学ぶこと。
- ・子どもの思いに限りなく寄り添うこと
- ・学校ではない第三の居場所として、安心感をもってもらえるようにどうすればいいかを考え続けること

- ・はじめは、マンツーマン対応からのスタートであったとしても、徐々に子ども間のつなぎ役を担い、最終的には子どもたちの関わりを見守るように意識と行動を移動させていくこと
- ・特に子どもグループに直接関わるボランティアには、リーダーではなく、カウンセラー的な役割を期待していること

【最後に】

「そにっとキャンプ」は、困るような状況に置かれた子どもたちを対象にしてきた。このような対象に対して、未だ十分に浸透しているとは言えない障がいの社会モデルやインクルーシブでない社会の方に課題があるという考え方に依拠してキャンプを構成してきた。その延長に、子どもの思いや「今、ここ」の感情や感覚を大切に扱うことに注意を傾けた。できる限り時間に追われることなく、目の前の課題に没頭できる経験や普段味わうことのできない自然への挑戦などの体験を経て、そのままの自分を肯定する自己肯定感の礎を培うことを目標としてきた。

そのため、当初の目標には「仲間づくり」はあえてゴールの一つに設定していなかった。しかし、ボランティアの支援と共に強烈な体験をする中で、子どもたちの多くは夏のキャンプが終わるころには、強い情緒的なつながりをもつようになっていくと感じるようになった。子どもたちが「群れる」ことを求めているのではないか、「仲間」の感覚を刺激するプログラムも考慮してはどうかとのアドバイスをいただき、以後のキャンプの構成の方向修正を行ったことを付け加えておきたい。

なお、キャンプの前後に奈良教育大学准教授富井奈菜実氏から多くの助言をいただいている。

参考資料 保護者向けアンケート質問項目

アンケートはWeb による回答形式。

「保護者の方について伺います」

- 1 このアンケートにご回答いただく保護者の方について、教えてください。
参加者の母親
参加者の父親
その他
- 2 このアンケートにご回答いただく保護者の方の【現在】の年齢を教えてください。
20 代
30 代
40 代
50 代
60 代以上
回答しない
- 3 このアンケートにご回答いただく保護者の方の【そにとキャンプに参加した時点】の、年齢を教えてください。
20 代
30 代
40 代
50 代
60 代以上
回答しない

「参加者の方について伺います」

- 4 【現在】の参加者の年齢を入力してください。（例） 15 （歳などは入力不要です）
- 5 参加者の性別を選んでください。
男性
女性
回答しない
- 6 【現在】の参加者の学校等を教えてください。
小学生

中学生
高校生
大学生（専門学校・大学院等を含む）
社会人

7 そにとキャンプに参加した年を教えてください。（複数回参加している場合は、初めて参加した年）

平成 25 年（2013 年）～令和 4 年（2022 年）

8 そにとキャンプに参加した【当時の】参加者の学年を教えてください。（複数回参加している場合は、初めて参加した年）

小学 3 年生から中学 3 年生

9 そにとキャンプに参加した【当時の】、支援機関などへの利用・参加状況について教えてください。（療育、放課後等デイサービス、適応指導教室など）

10 参加者に、発達障がいがある場合は、可能な範囲でご記入ください。

11 そにとキャンプに参加した【当時の】通学状況について教えてください。（通常学級に通学・不登校、特別支援学級に通学・不登校など）

12 そにとキャンプに参加した【当時の】参加者の日常の様子をご記入ください。（特に【行動面】についてご記入ください。）

13 そにとキャンプに参加した【当時】の参加者の日常の様子をご記入ください。（特に【対人関係】についてご記入ください。）

「そにとキャンプの参加の経緯について伺います」

14 そにとキャンプに参加したきっかけをご記入ください。（知り合いからの紹介、学校からの紹介など）

15 なぜ、そにとキャンプに参加させようと思ったのですか。

【参加者】そにとキャンプの参加経験について伺います。

16 そにとキャンプに参加（1 年間を通して）した前と後で、【参加者】に家庭や学校でどのような変化がありましたか？

17 変化のきっかけとなった出来事で思いつくことがあれば、具体的に教えてください。

18 そにとキャンプの参加経験は【参加者】の現在の生活にどのような影響を与えていると思いますか。

「【保護者】そにとキャンプの参加経験について伺います」

19 そにとキャンプに参加（１年間を通して）した前と後で、【保護者】にどのような変化がありましたか？

20 そにとキャンプの参加経験は【保護者】の現在の生活にどのような影響を与えていると思いますか。

「参加者・保護者同士の繋がりについて伺います」

21 そにとキャンプに参加後、保護者同士の繋がりなどで、参加者・保護者同士の関係は続いていますか。

そにとキャンプ後から今まで繋がりがある。

そにとキャンプ後から数年は繋がっていたが、現在は関係が続いていない。

そにとキャンプ後から繋がりが無い。

その他

22 参加者・保護者同士の繋がり【参加者】にとってどのような存在ですか。繋がりがある場合は、どのような影響がありましたか。

23 参加者・保護者同士の繋がり【保護者】にとってどのような存在ですか。繋がりがある場合は、どのような影響がありましたか。

24 インタビュー調査について伺います。

インタビュー調査に同意いただける場合に、アンケート調査は記名式となります。インタビュー調査にご協力いただけますか。

引用文献

- 国立曽爾青少年自然の家. 国立曽爾青少年自然の家 教育事業「そにっとキャンプ」報告書. 2023 年
- 富井奈菜実. そにっとキャンプの意義に関する一考察. 国立曽爾青少年自然の家 教育事業「そにっとキャンプ」報告書, 2023 年, p46-47
- 富井奈菜実, 越野和之, 別府哲. 鉄オタ集結! 「好き」を強みに 発達障害のある子の居場所 [鉄オタ倶楽部]. 株式会社クリエイツかもがわ, 2024, 115p, 978-4-86342-372-5
- 石田陽彦. 発達障害の子どもたちに市の教育委員会と KU-RENKA が連携し、自然キャンプを実施する意味について. 社会的信頼学, 2014 年, 2 号, p73-77
- 石田陽彦. 国立曽爾青少年自然の家が軽度の発達障害のある子どもたちに行ったキャンプ「そにっとキャンプ」の意味について. 国立曽爾青少年自然の家さあはじめよう! そにっとキャンプだってできるもん, 2014 年, p3-5
- 竹内靖子, 石田易司, 野口和行, 高瀬宏樹. キャンプの魅力・課題・環境づくり-主に発達障がい児キャンプに注目して-. 桃山学院大学総合研究所紀要, 2020 年, 46 巻, 1 号, p19-37
- 小澤永治, 遠矢浩一, 針塚進. 発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」の意義と課題②: 卒業生の保護者を対象とした面接調査から. 九州大学総合臨床心理研究. 2013 年, 4 号, p45-59
- 岡本祐子, 小嶋由香, 馴田佳央. 自然体験活動が不登校経験者の発達に及ぼす影響と意味づけ. 広島大学心理学研究, 2011 年, 第 11 号, p189-199
- 国立曽爾青少年自然の家. あらたな一歩をふみだせ! そにっときゃんぷ. そにっとキャンプ紹介パンフレット. 2017 年
- 渡部かなえ. 発達障害・知的障害を持つ子どもたちの自然体験活動の意義と現状. 人文研究 205 号, p59-74, 2022 年

参考文献

- 秋山胖 統合キャンプハンドブック～発達障害児・家族とのあゆみキャンプ 25 年の実践から～. 久美株式会社, 2008, 150p, 978-4-86189-057-4
- 中村豊, 藤崎育子. 不登校児童生徒を対象とした宿泊体験活動の心理教育的援助サービスと教育的意義に関する研究. 東京理科大学教職教育研究, 2021 年, 7 号, p. 13-23
- 山川久恵, 宮本正一. 不登校児のためのキャンプが参加親子の自己受容に及ぼす効果. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 2001 年, 創刊号, p. 65-72
- 小林朋子, 小柴孝子. 学生ボランティアの専門的なかわりを活用した不登校児キャンプの試み-専門的な事前指導が学生ボランティアと子どもに与えた影響について-. 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 2005 年, 11 号, p137-143
- 笠井孝久. 不登校児キャンプの心理臨床的意義. 千葉大学教育学部研究紀要, 2008 年, 56 巻, p57-61

- 笠井孝久. 不登校児を対象としたキャンプに参加した学生スタッフの学び. 千葉大学教育学部研究紀要, 2006 年, 54 巻, p99-103
- 川田貴之, 小池孝範. 不登校傾向児童生徒の自己肯定感向上を目指した社会教育からのアプローチ～秋田県立少年自然の家における「ふれあいキャンプ」の実践から～. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 2021 年, 43 号, p173-186
- 竹内靖子, 石田易司, 野口和行, 高瀬宏樹. キャンプの魅力・課題・環境づくり-主に発達障がい児キャンプに注目して-. 桃山学院大学総合研究所紀要, 2020 年, 46 巻, 1 号, p19-37
- 竹内靖子 坂本昭裕. 相互成長の場としての発達障害児キャンプ. 野外教育研究, 2018 年, 22 巻 1 号, p37-49
- 堀出知里. 通年型冒険キャンププログラムが不登校児の心理・社会的変化に及ぼす影響. 博士論文, 筑波大学大学院体育学研究科, 2004 年,
- 樋口隆弘, 湯浅龍, 石田陽彦. 子ども自身、保護者、観察者による、発達障害児のレジリエンス評価. 関西大学心理臨床センター紀要, 2019 年, 10 巻, p21～25
- 顯谷美也子, 湯浅龍, 石田陽彦, 川崎圭三. 関西大学心理臨床センター紀要, 2015 年 6 巻, p41～45
- 滝口圭子, 寺田容子, 柳優美, 武澤友広, 近藤武夫, 磯部美良, 落合俊郎. 幼年教育年報, 2011 年, 第 33 巻, p55-64
- 築山泰典, 藤井雅人. 年間継続事業としての不登校キャンプの検討—ふりかえりとしての体験スピーチ会からの検討—. 福岡大学スポーツ科学研究, 2009 年, 40 巻 1 号, p11-22
- 築山泰典, 藤井雅人, 中嶋優友, 田中忠道. 年間継続事業としての不登校キャンプの効果 第 2 報 : ソーシャルスキルと生きる力からの検討. 福岡大学スポーツ科学研究, 2010 年, 41 巻 1 号, p9-19
- 兄井彰. 不登校児童・生徒を対象としたキャンプ療法の効果. 福岡教育大学紀要, 2001 年, 第 50 号, p85-90
- 岡本祐子, 奥田紗史美, 尾方綾, 神谷真由美, 菊池由莉, 山本彩留子, 上手由香, 宮崎愛弓. 自然体験活動に参加した不登校児童・生徒の内的変容過程—継続参加時のバウムテストの分析—. 広島大学心理学研究, 2012 年, 第 12 号, p71-84
- 岡本祐子, 小嶋由香, 馴田佳央. 自然体験活動が不登校経験者の発達に及ぼす影響と意味づけ. 広島大学心理学研究, 2011 年, 第 11 号, p189-199
- 山口穂菜美, 吉本茜, 原口英之. 我が国における発達障害のある子どもの親に対するペアレントトレーニングの研究動向—系統的レビューによるアップデート—. 行動分析学研究, 2021 年, 第 36 巻, 第 1 号, p67-94
- 樋口肇. 統合キャンプの意義及び運営に関する考察—2006 みどりキャンプの実践より—. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 2007 年, 第 7 号, p131-142

(お願い)

本報告書を引用された場合、調査内容を参考に事業を実施された場合には、今後の参考とさせていただきたいと存じますので、国立曽爾青少年自然の家まで、メールにてその旨を御連絡いただければ幸いです。また、感想・コメントもお寄せください。

国立曽爾青少年自然の家 実践研究報告書

「そにっとキャンプ」の意味・意義 ～保護者に対する聞き取り調査から～

令和7年3月

編集・発行

(独) 国立青少年教育振興機構 国立曽爾青少年自然の家

〒633-1202 奈良県宇陀郡曽爾村太良路 1170

TEL 0745-96-2121 MAIL soni@niye.go.jp
